

琉球大学学術リポジトリ

島嶼環境域における屋敷防風林の意義と地域住民の意識：沖縄県本部町備瀬集落を事例にして

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2008-02-14 キーワード (Ja): 屋敷防風林, 風水村落, 本部町備瀬集落 キーワード (En): Premises Forests, Fung-Shui Village in Okinawa, Bise Village of Motobu Town in Okinawa 作成者: 仲間, 勇栄, 菊地, 香, Nakama, Yuei, Kikuchi, Koh メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/3598

島嶼環境域における屋敷防風林の意義と地域住民の意識 —沖繩県本部町備瀬集落を事例にして—

仲間勇栄・菊地 香

Yuei NAKAMA, and Koh KIKUCHI

The Meaning of Premises Forests Surrounding Village Residences and Regional Inhabitants' Consciousness in Island Regions -Bise Village of Motobu Town in Okinawa Prefecture as an Example-

キーワード：屋敷防風林、風水村落、本部町備瀬集落

Key words : Premises Forests, Fung-Shui Village in Okinawa, Bise Village of Motobu Town in Okinawa

Summary

Bise village at lat. 26' 42" N. and long. 127' 53" E. is located at the tip of the Motobu peninsula in the northern part of Okinawa island. The administrative district belongs to Motobu town. The village is on an arc-like dune with a length of 1.1 km. The total population of the village is 593 (as of March 2003) and well balanced; males are 299 and females 294. People over 60 occupy more than half of the population. The main industry is agriculture and sugarcane is the key crop.

In Bise village, premises forests of *Garcinia subelliptica* Merr. with heights of 8-12 m, chest-height diameters of 30-60 cm and estimated ages over 100 years can be seen (Miyagi, 1983). These premises forests must have been formed artificially starting in the modern era. The village people call the *Garcinia subelliptica* puku:gi or to:purugi in a local dialect. They have been utilizing the trees in various ways for a long time. They buried the trees in the sand under the sea for a long period of time to make them a mothproof and used them as timber for pillars, beams and floors. Withered branches and leaves were used as fuel. Leaves were used in place of toilet paper and for Japanese sandals.

In Okinawa prefecture, there are villages where premises forests (forests surrounding each person's residence by *Garcinia subelliptica*) are still well preserved. *Garcinia subelliptica* Merr. forests have been considered useful, but since they also block off the sunshine, they have been cut down and, thus, are disappearing. Bise Village, taken as an example for this thesis, is a good example of where the *Garcinia subelliptica* forests have been well preserved in Okinawa prefecture.

Premises forests of *Garcinia subelliptica* in Okinawa have been grown throughout history and how to make use of them from now on has become a big issue. In this thesis, it is intended to explore structures of appreciation for evaluation today through researching how regional inhabitants think about premises forests of *Garcinia subelliptica* based upon their historical meaning by taking Bise village as a case study.

Regarding the formation of villages in Ryukyus in the modern era, it is a historical fact that ideas based upon Fung-Shui were applied. It can be considered that premises forests of *Garcinia subelliptica* in Bise were formed in conformity with the ideas of Fung-Shui by the royal capital during the process of modern re-formation of villages.

According to principles of Fung-Shui, it is topography that divines the fortunes of the land. With the Fung-Shui, earth is a living organism and the vital energy (vital energy pulse or dragon pulse) runs through it. Being able to read right and wrong of geographical features, through which the life energy flows, is the basis of Fung-Shui.

Fung-Shui seem to have been introduced from China in the end of the 14th century. Today, Fung-Shui principles are distributed mainly in the cultural sphere of the countries of East Asia such as southern China, Taiwan, Hong Kong, Korea and Ryukyu.

The way of thinking based upon Fung-Shui was applied to a wide variety of fields from the planning of houses, villages, cemeteries, cities and metropolises to management of mountains as a national policy in Ryukyus from the 17th through the 18th century.

Fung-Shui landscapes, which were made artificially in modern times, including premises forests (forests surrounding each person's residence by *Garcinia subelliptica*), have been a rational land utilization system to harmonize human activities with the variety of living things in island regions. Regarding regional inhabitants' appreciation of the premises forests, they evaluate their functions primarily as softening typhoons and heat and also consider them essential for preservation of views and peace of mind. They think the forests of *Garcinia subelliptica* should be utilized for environmental education and tourist attractions.

はじめに

1. 論文の目的

沖縄県内には、今でもフクギ (*Garcinia subelliptica*) の屋敷林がよく保存されている集落がある。このフクギ林は、防風・防潮の機能があるため重宝がられている反面、太陽光が入りにくいということで伐採され、その姿を消しつつある。本論文で事例として取り上げる本部町備瀬集落は、県内でもフクギの屋敷林がよく保存されているところである(写真1, 2)。



写真1. フクギの屋敷林に囲まれた本部町備瀬集落の景観



写真2. 備瀬集落内のフクギの屋敷林(前方はツアー客)

沖縄県内のフクギの屋敷林は歴史的に作られたものであるが、それをどう保存し、今後どのように活用していくべきか、大きな課題である。

備瀬集落のフクギ屋敷林については、建築構造学的視点から屋敷とフクギ林の配置に関する古谷ら(2002)の調査報告がある。幸喜(1978)は、備瀬集落北側の海岸林の飛塩について、付着塩分量の面から、その機能について報告している。

このフクギ屋敷林の歴史や住民による評価意識については、これまでの報告事例ではほとんどみられない。本論文は、フクギ屋敷林の歴史的意義を踏まえて、このフクギ屋敷林を地域の人々がどのように考えているのか、備瀬集落を事例調査地として取り上げ、その現在の評価の意識構造を探ることが目的である。

2. 調査地の概要

備瀬集落は、沖縄本島北部の本部半島の先端部、北緯26度42分、東経127度53分に位置する。行政区は本部町に属する。村落は長さ1.1kmの弓形の砂丘の上に形成されている。集落は南西から北東にかけて海に囲まれているため、気象の変化が激しい。夏には台風が襲来し、冬は北の季節風が吹き荒れる。夏は砂地のために輻射熱で日中は焼けつくように暑くなる。

村落の総人口は593人(2002年3月末現在)で、うち男性が299人、女性が294人でほぼ均衡している。人口の半分が60歳以上の人々で占められている。

主な産業は農業で、サトウキビが基幹作物となっている。

備瀬の集落内には、高さ8~12m、胸高直径30~60cm、推定樹齢100年以上を越すフクギの屋敷林がみられる(宮城, 1983)。筆者(仲間)が計測した中でも、胸高幹廻りが2.32mの巨木もみられた。『備瀬史』(仲田, 1984)では、270~280年の樹齢と述べられている。その根拠は明らかでないが、何れにせよ、その中の大木の樹齢は、数百年のオーダーで考えて間違いのないだろう。

この備瀬のフクギ屋敷林の起源は不明ではあるが、村落が形成される過程で漸次植栽され、後述するように、近世以降に人為的に整備され完成されたものと考えられる。

このフクギを集落の人々は方言でプクギ或いはトープルギーと呼んでいる。集落の人々は、このフクギを昔から様々な形で利用してきた。木を長期間海中の砂の中に埋めて防虫処理し、柱、桁、床などの材木として利用した。枯れた枝葉は燃料になった。また葉っぱはトイレトペーパーや草履の代用にもなった。旧盆の前後には、実を食べにコウモリの大群が飛来するという。

I 備瀬フクギ林の成立とその歴史的意義

1. 地割制村落との関連

備瀬集落のフクギの屋敷林が、いつごろできたのか、その成立の経緯については、歴史資料等もほとんど残されていないので、よくわからない。

しかし、集落の形態が碁盤目状で、各屋敷が整然とフクギ林で囲まれている特徴からみて、仲松弥秀のいう「地割制集落」の一つではないか、と考えられる。仲松は地割制（土地の定期的割り替え制度）の開始年を1737年に想定し、蔡温（18世紀の20年代から50年代の尚敬王時代の三司官で政治家）による実施説をとっている（仲松, 1977）。

仲松説によれば、碁盤目状の「地割制集落」は、沖縄全域でおよそ180箇所あり、海岸沖積地の砂浜地や平坦地にまとまって分布しているという。これらの集落は1736年以前にはほとんどなく、1737年以後の集落移動や新村の創建などでできたものだという（仲松, 1977）。

地割制の起源については、古琉球時代説と慶長期以後説（1609年以降）があるが、ここでは「地割制集落」を、村落の近世的再編の一つの形態と理解して、仲松の「地割制集落」説に依拠することにする。

備瀬集落の東側の丘陵地には、グスク山（先祖の墓）と呼ばれているところがある。この地には拝所もあり、中には石垣の囲いもあって集落跡のようにもみえる。グスク山周辺の丘陵地には昔、人が住んでいたという話もある。現在の備瀬集落がいつごろできたのか、実証できる資料はないが、おそらくグスク山周辺に散らばって居住していた人々が、18世紀の初頭以降、王府によって積極的に実施された村落統合政策で、現在の備瀬集落の地に漸次集められ、新しい碁盤目状の村落が形成されていったのではないかと考えられる。

2. 風水的土地利用と村落景観の意味

近世期の琉球における村落の形成にあたっては、そのコンセプトとして風水思想が応用されている歴史的事実がある。

風水とは土地の吉凶を判断する地相術のことである。風水では、大地は一個の生命体で、その地中に気（気脈、龍脈）が流れているとみる。その気の流れる地形の善悪を読み取ることが、風水の基本となる。

この風水は14世紀末ごろに中国から伝来したとみられている。現在ではこの風水は、南中国、台湾、香港、韓国、琉球などの主に東アジア文化圏に広がっている。

この風水の考え方は、主に17世紀から18世紀にかけて、琉球国内で住宅、集落、墓地、国都などの造成から、山林の管理までの広い範囲にわたって国策として応用されている。

この風水の技術を現場で応用しアドバイスする技術者が、風水師（別名で風水看・風水見）である。琉球王府の三司官である蔡温も風水師の一人であった。この風水師たちが、近世期の琉球国内で村落の形成に深く関わっていたことが、歴史資料などから読み取れる。

1857年の羽地間切真喜屋・稲嶺両村の風水見分日記資料をみると、風水保全のために、間切（今の市町村）や村内の風水所、屋敷などに「松」（*Pinus luchuensis*）や「フク木」（*Garcinia subelliptica*）を植えるよう指導している（窪, 1990）。

近世琉球では、集落を核として、外円に田畑→山野→杣山と広がり、それぞれの場所に、様々な土地利用がパッチ状に分布していた。山野は里山のことで、主に田畑の緑肥、生活用薪、用材などの採取地で、集落との関わりの深い共同利用地である。その管理利用の主体は、集落から間切にまたがっていた。

杣山は琉球王府の御用木の伐出地で、杣山奉行の管理体制の下、風水思想にもとづいて、各地域で集落や間切単位で厳しく管理されていた。林野面積の約70%を占める（仲間, 1984）。

とくに王府が力を入れて農民を指導していたのは、風水思想にもとづく海岸域から里山にかけた森づくりであった。海岸域では浜抱護、村落内やその外周では村抱護や間切抱護、里山では風水山などの形で、風水的土地利用システムが出来上がっていた。これらは風水思想にもとづいて、18世紀以降、王府の村落・林政改革の一環として、新たにくられた村落風水景観の要素の一つであった。

抱護とは風水概念の一つで、気が散逸しないように、ある地域（山地・村落・屋敷）などが森や地形で囲まれた状態のことである。

浜抱護は潮垣、村抱護は村垣とも称される。潮垣と称する浜抱護にはアダン（*Pandanus odoratissimus*）、オオハマボウ（*Hibiscus tiliaceus*）、クロヨナ（*Pongamia pinnata*）、シマグワ（*Morus australis*）、ススキ（*Miscanthus sinensis*）などの植物を植えるよう王府は奨励している。

浜抱護や村抱護や間切抱護は、今日の防風林に比べられるが、防風の機能を主眼とする防風林と、風を貯え気の散逸を防ぐことを第一義に考える抱護とは、まったく異なる概念である。なお抱護林という用語は、明治以降、防風林の意味の沖縄的表現法で、近世期の用語法ではない。

備瀬のフクギの屋敷林も、この王府の風水思想にもとづいて、村落の近世的再編過程の中で、漸次形づくられ完成されたものとみることができる。

集落を核としたこのような海岸域から里山・杣山に連なる風水景観、すなわち風水的土地利用システムが、島の単位で総合化してみた場合、人間の活動と生物多様性との関わりで、重要な意味をもっていることが近年わかってきた。たとえば、浜抱護や村・間切抱護、屋敷抱護などの存在は、今日というビオトープ空間や緑のコリダーの役割を果たし、島嶼地域における生態系のバランスをとる重要な要素として見直されている（仲間, 2002）。

3. フクギの屋敷林としての選定理由

ところで、なぜ、数多い樹木の中から、とくにフクギが選抜され、琉球列島内で村落の屋敷林として利用されていたのか。

全世界でフクギの種類は約250種あって、世界の熱帯地域とくに熱帯アジアからフィジー諸島にかけて多くの種類が分布しているという（初島, 1975）。

フクギの学名は *Garcinia subelliptica* である。*Garcinia* はフランスの植物学者 *Garcin* の名前に因んでいる。

subelliptica の sub は「下の, 亜」, *elliptica* は「楕円形の」語意で, 総じて「やや楕円形の」の意味になる. フクギの立木や葉っぱの形状が, やや楕円形であることが, 種名の由来になっている.

フクギはオトギリソウ科の植物で, 同じ科に沖縄ではテリハボクがみられる. 沖縄のフクギは西表島に野生と見られる群落があるが (初島, 1975), その他の地域のフクギ林はほとんど植栽されたものである.

フクギが屋敷林として, いつからどのような理由で植えられたのか, よく分からないが, 一つは, この樹種の形態的特徴に由来すると考えられる.

フクギは通直で枝葉が密生し, また葉っぱが厚いため燃えにくく, そのため防火や防風の最適な樹木としての評価が一般的に高い. このことは後述するアンケートの結果からも明らかである.

その他に, フクギは成長すれば建築用材として利用できる. その樹皮からは黄色の染料がとれる. 枯れた枝葉は燃料にもなる. また葉っぱはトイレの紙代用にもなる. 立ち木の状態から枯れ枝葉まで, これだけ有効に活用できる樹木は, そう多くはない. この樹木の多面的な利用の観点から, 自然にフクギが選択されたのではないだろうか.

1719年, 冊封副使として琉球にきた除菴光の『中山伝信録』(1921年刊)には, 「福木」の形態的特徴に関する記述が見られる (原田, 1982). 1857年, 風水師である神山里之子親雲上が羽地間切真喜屋・稲嶺両村の風水を見分した時の記録には, 風水改善のために屋敷・集落内に「フク木」を植えるよう指導している (窪, 1990).

これらの史料は, 近世期の琉球国内で, すでにフクギ林の景観が一般に存在していた事実を物語っている, といえよう.

II フクギ屋敷林に関する住民の意識

1. 調査の概要

フクギの屋敷林を地域の住民がどのように考えているのか, その評価の内容を探るためにアンケートを実施した.

アンケートは, フクギ屋敷林の存在意義とその活用の仕方に焦点を絞って, 8つの質問項目を設定し, 調査者が本人に面接して調査票に記入する方法で行った. 調査期間は2003年3月15日~20日である.

調査は18歳以上の集落在住者を対象に行った. 有効回収数は207人で, 回収数は総人口593人の35%にあたる.

回収票の51%は男性, 48%は女性である. 年齢構成で60代以上が53%と多くを占めている. 40~50代の割合は33%である. 回答者の職業に関する記述では, 無職 (17%), 農業 (14%), 主婦 (12%), 大工 (7%) などの比率が目立っている.

調査票の分析結果から, 年齢・職業別の傾向は有意差がでてこないで, 以下では, 全体と男女別の集計で考察を行った.

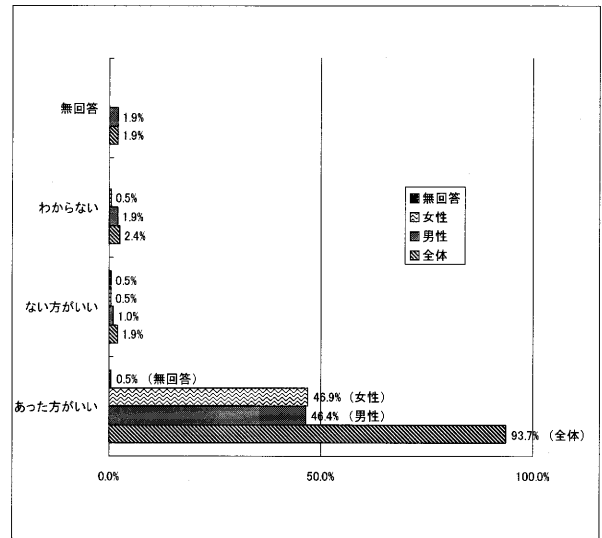


図1. フクギの屋敷林はあった方がいいと思いますか

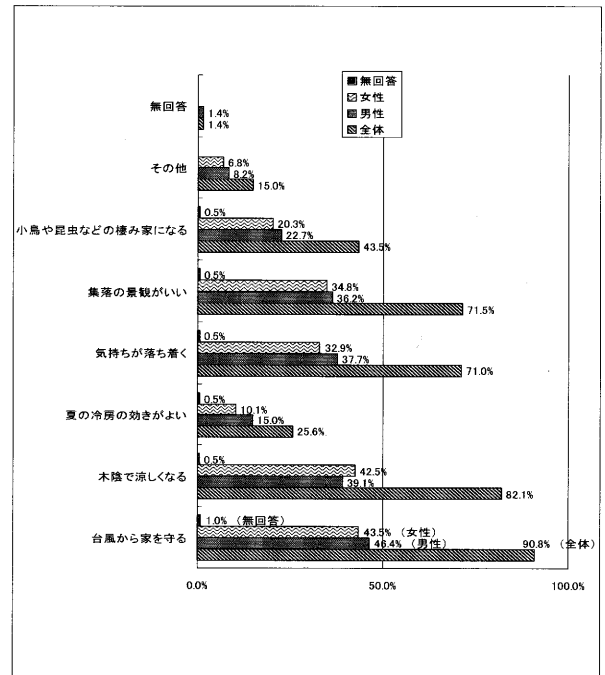


図2. フクギの屋敷林があることで, あなたが得ている良いこととは何ですか (複数回答)

2. 結果及び考察

「フクギの屋敷林はあった方がいいと思いますか」(図1)との質問で, 「あった方がいい」と答えた人が94%と圧倒的多数を占め, フクギの屋敷林としての存在意義を大多数の人々が認めている. 男女別には, ほぼ同じ比率で, 「あった方がいい」と答えていて, 男女間の意識の違いは見られない. この「あった方がいい」という意識は, 当然, フクギ屋敷林の保全とも相関関係の意識構造にあると考えられる.

「フクギの屋敷林があることで, あなたが得ている良いこととは何ですか」(図2)の質問で, 7つの回答項目を設定し, その中から該当するものをいくつでも選択させてみた.

最も高い回答比率を示したのは、「台風から家を守る」で91%，次いで「木陰で涼しくなる」が82%，「集落の景観がいい」が72%，「気持ちが落ち着く」が71%，「小鳥や昆虫などの棲み家になる」が44%，「その他」が15%の順位づけとなっている。男女別にみても、この順位づけの比率はほぼ変わらない。「その他」には、防火、防潮、防寒などの機能に関する記述が多かった。

これらの回答から、集落の住民が、沖縄における夏の台風や暑さなどの厳しい自然環境の改善に寄与しているフクギ屋敷林の意義を強く認めている点を読み取れる。つまり住民は台風や暑さの緩和などの生活環境の保全に果たすフ

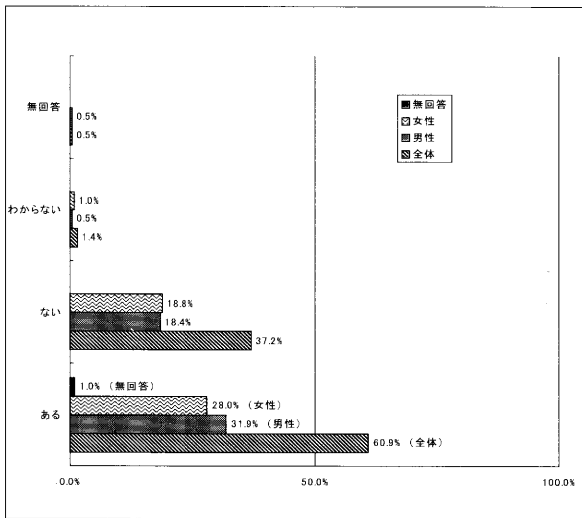


図3. フクギの屋敷林があることで、困ることはありますか

クギ屋敷林の役割を第一に評価した上で、景観や気持ちの安らぎに副次的に寄与しているフクギ屋敷林の機能を認める意識構造になっているといえる。

これまではフクギ屋敷林のポジティブな面からの評価をみてきたが、次ぎにこのフクギ屋敷林のネガティブな面に焦点を当てて、以下の質問を試みた。

「フクギの屋敷林があることで、困ることはありますか」(図3)の問いに、61%の人が「ある」と答えている。「ない」と答えたのは37%にとどまっている。

「ある」と答えた人に、「それはどのようなことですか」(図4)と、その内容について聞いてみた。6つの回答項目から複数で選択させたところ、「枝葉が落ちて困る」(61%)、「実が落ちて臭い」(57%)の二つが、大きな理由としてあげられている。この選択傾向は男女間でもほぼ同じである。「その他」(29%)では、前述の理由との関連で、「掃除が大変」、「ハエや蚊が多い」などの記述が多く見られた。

「フクギの屋敷林の活用についてどう思いますか」(図5)の設問に対する回答では、「活用すべき」(43%)と「今のままでよい」(45%)がほぼ同率になっている。

これを男女別にみると、「活用すべき」では、女性が23%、男性が19%、「今のままでよい」では、男性が28%、女性が17%となっている。どちらかという、女性の方がフクギ屋敷林の活用に関しては、積極的な意識がうかがわれる。

「活用すべき」と答えた人に、その内容について尋ねてみた(図6)。4つの回答項目から複数で選択させた。その結果を列記すると、以下のとおりである。「子供達の環境教育の教材として活用する」が63%と最も高く、次いで「観光資源として開放し、旅行者に見せる」が54%、「緑化木の生産のために活用する」が38%の順となっている。

「活用すべき」を男女別にみると、「子供達の環境教育の教材として活用する」では、女性が38%、男性が24%、

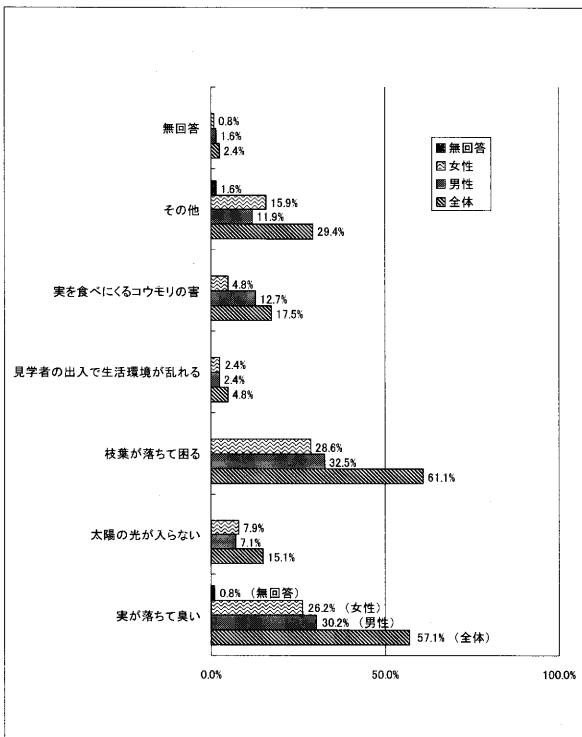


図4. 「ある」と答えた方にお聞きします。それはどのようなことですか (複数回答)

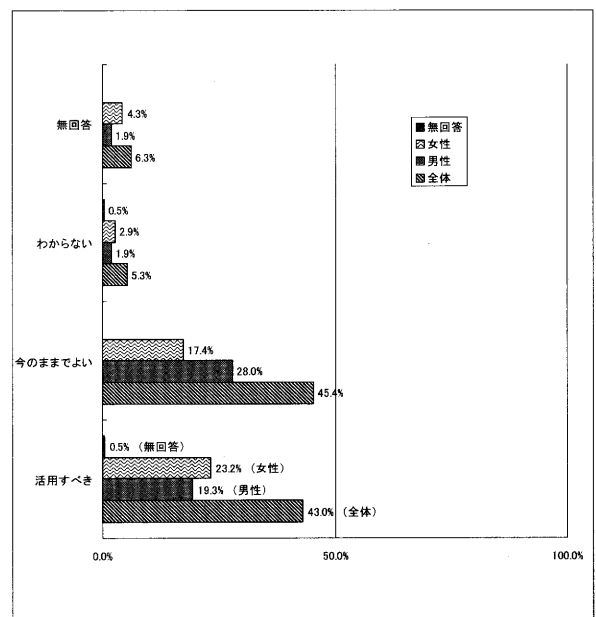


図5. フクギの屋敷林の活用についてどう思いますか

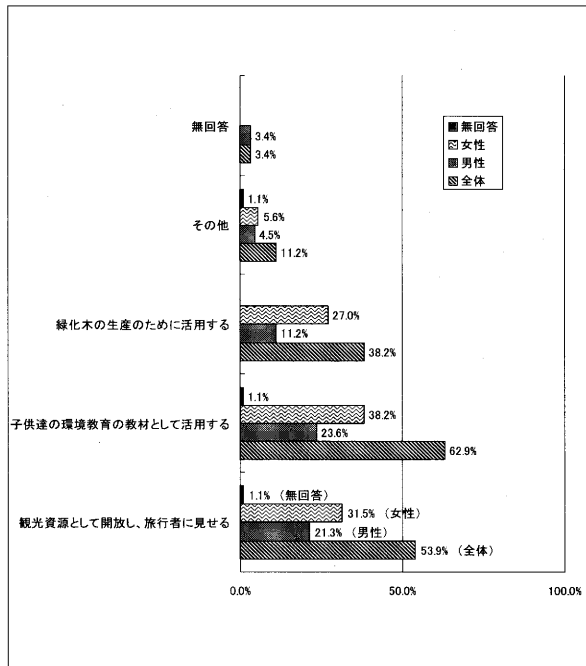


図6. 「活用すべき」と答えた方にお聞きします。その内容について、次の中から選んで下さい(複数回答)

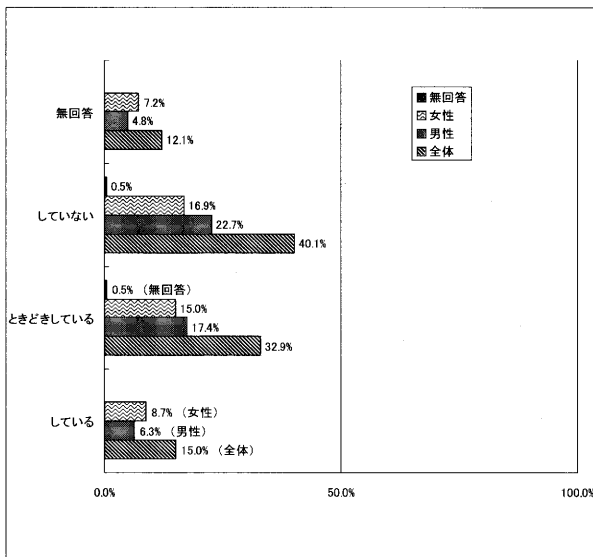


図7. あなたはフクギの屋敷林を定期的に手入れ(剪定、抜き切り)していますか

「観光資源として開放し、旅行者に見せる」では、女性が32%、男性が21%、「緑化木の生産のために活用する」では、女性が27%、男性が11%となって、いずれも女性の比率がより高くなっている。

「活用すべき」と回答した人々、とくに女性は、主に環境教育と観光資源として、今後、フクギ屋敷林を活用すべきである、と考えているようである。

フクギ屋敷林の保全のために、剪定や抜き切りなどの手入れを定期的に行っているかどうかの質問(図7)に対して、

「している」が15%、「ときどきしている」が33%、「していない」が40%となっている。「している」と「ときどきしている」を合わせると48%に達し、ほぼ2人に1人の割合で手入れを行なっている計算になる。

フクギ屋敷林の手入れについて、男女別にみると、「している」と「ときどきしている」を合わせた比率は、24%で全く同じである。「していない」の比率では、男性の方が高く、逆に「している」では、女性の方が高くなっている。このことは男性よりも女性の方が、フクギ屋敷林の手入れに積極的に関与している傾向をうかがわせる。これは日頃から家事などに従事する女性の立場の違いからきていることとも考えられる。

質問項目の最後に、フクギ屋敷林について、日頃考えていることを自由に記述させてみた。55名の方から回答が得られた。その内容を今後の課題の面から要約すると、以下のようになる。

第1は、空き屋敷の問題である。集落内にはかなりの数の空き屋敷がみられる。そこは放置され蚊の発生源にもなっている。今後の活用と合わせて、何らかの対策が必要である。

第2は、フクギ屋敷林の整備の仕方である。戦前は青年団で定期的に剪定していた。また昔は、学生が登校する前に掃除をする習慣があった。現在は年に2回ぐらい婦人会で集落内の掃除をしている。各屋敷内の掃除は個人で行っている。観光地にするなら行政などと連携をとりながら美化運動に取り組むべきである。

第3は、フクギ屋敷林の文化財としての取り扱い方である。現在、このフクギ屋敷林は文化財として指定されていない。今後、フクギ屋敷林の管理条例等を制定して保全すべきである。フクギ屋敷林の景観の保全のために、その景観に合った建物をつくるべきである。

まとめ

近世期に人為的に作られたフクギの屋敷林を含む風水景観は、島嶼地域における人間活動と生物多様性の調和を図る合理的な土地利用システムであった。この風水景観の一つであるフクギの屋敷林に関する地域住民の意識は、台風や暑さの緩和などの機能を第一に評価しながら、景観保全や心の安らぎにとって、不可欠のものと認識している。そして今後、環境教育や観光資源としてフクギ林を活用すべきとしている。

謝辞

アンケート調査では、備瀬集落の人々にお世話になった。琉球大学農学部亜熱帯フィールド科学教育研究センター助教授の新里孝和氏には、植物の学名の由来等で学問的なご教示をいただいた。これらの方々から感謝申し上げる。

引用文献

1. 幸喜善福 1978. 海岸保全の見地からの沖縄の飛塩に関する研究. 琉球大学農学部学術報告. 第25号. P.429-554.
2. 仲間勇栄 2002. 村落環境の管理システムとしての山林風水の意義. 人間・植物関係学会誌. 2(1): P.39-46.
3. 仲間勇栄 1984. 沖縄林野制度利用史研究. P.21-44. ひるぎ社. 沖縄.
4. 仲松弥秀 1977. 古層の村・沖縄民俗文化論. P.111-138. 沖縄タイムス社. 沖縄.
5. 仲田栄松 1984. 備瀬史. P.41. 本部町備瀬区事務所. 沖縄.
6. 初島住彦 1975. 琉球植物誌. P.415. 沖縄生物教育研究会. 那覇.
7. 原田禹雄訳 1982. 除藻光著. 中山伝信録. P.36. 言叢社. 東京.
8. 古谷誠章 2002. 沖縄県本部町備瀬の福木集落研究調査報告書. P.1-25. 早稲田大学理工学総合研究センター. 東京.
9. 宮城康一 1983. 沖縄大百科事典. P.300. 沖縄タイムス社. 沖縄.